

争を行わぬように子々孫々に申し送り、戦没なされた御英霊の安からぬことを祈ります。

桂林攻略戦の回想

長崎県 宮崎 新作

私は小倉にあった西部七十三部隊（野戦重砲兵第六連隊）へ、昭和十七年五月十五日教育召集されたのです。大正十年九月十五日生まれですから、現役なら一月に入営のはずでした。

同年七月十八日、門司港出港、八月一日、上海上陸、十九日、湖北省雲溪の呂第五九二〇部隊、野戦重砲兵第十四連隊に入隊して、第四中隊に配属されました。

岳陽県は非常に暑い所で、そこで一期の教育を受けたのですが、私は下士官候補志願をしていたので、鉄道警備派遣、その他の勤務は免除されましたが、敵襲を受けることも、しばしばありました。下士官候補者教育は南京の榮第四五一六部隊という所で、十カ月間、

相当に厳しいものでした。

昭和十九年二月に二十四名が原隊に復帰しました。部隊は新陽に集結中で、桂林攻撃の訓練をしていました。二十四名全員が伍長に任官していて、各地の兵站で食糧その他の支給を受け、各地の駐屯地の部隊が護衛して、順送りに部隊に帰ったわけです。

同年十一月九日、桂林総攻撃第一日は漸く日没を迎えた。正面の広部隊（第五八師団）右翼歩兵部隊の第一線は一の高地、二の高地の山麓前面に張り囲らした鉄条網に前進を阻まれているのが観測された。

桂林の総攻撃は午前五時二十分直協砲兵諸部隊の一斉射撃により始まり、その砲声は暁を破って殷々として山野にこだました。七時半久しぶりに見る友軍機が飛来し市街上空を飛ぶ。我が部隊は友軍砲兵諸部隊の最右翼に砲列を布き、桂林北端西側のコンクリート三角壕の屋上に陣するわが中隊観測所からは、朝霧にまつまれた一の高地・二の高地の敵火点やトーチカに炸裂する弾着は観測できたが、逆光に遮られた山並みは墨絵そのまま、岩肌に囲まれた敵陣地への着弾効果

は詳らかでなかった。寧ろ友軍砲兵の集中射の威力は敵軍を圧倒したものだと思われたが、敵重砲（ラインメタル十五榴）は依然健在の様で、鶴の嘴にも似た老人山の方向よりの砲声が時折山野にこだまする。

左翼北門と覚しき方向に聳える望楼高地（敵は筈のように直立して切り立った岩山の頂上に観測所を設け友軍の動きが一望できる状況にあったので私たちはこの高地を望楼高地と名付けた）目がけて断続射撃を浴びせる友軍山砲弾が山肌に破裂したが、容易に観測所を破壊出来ず一日中みなを口惜しがらせた。

観測所でみなが夕食を終えた頃、本部に招致された奥村中隊長帰る。明朝、広部隊左翼隊支援のためわが中隊は砲一門をもって北門破壊の任を受けた由。直ちに砲側にある禰宜第一小隊に指示が出る。指揮小隊も漆黒の暗の中を観測器材の撤収、陣地移動準備を始める。

中隊長の言によれば重慶軍の岩山を利用した頑強な銃眼陣地の制圧に手間どり、広部隊歩兵第一線の攻撃は予期以上に進まず明朝わが十五榴をもって戦車隊と

協同して北城門攻撃に決したとのこと。

私は傍らの中島曹長と通信掛の横道軍曹に

「明日はいよいよ突撃砲兵だな、直接照準射撃なら一発必中だよ」

と興奮気味に話しかけた。

十一月十日総攻撃第二日は明けた。黎明を待たずわが十五榴は公路上を砲車連結の偽偽装を施し、臂力で紡績工場引込線の辺まで押し進めた。北門まで一キロメートル足らずの距離だ。本部指揮班長と歩兵部隊・戦車隊幹部の打ち合せが始まる。

霧が明けるのを待ち砲側で観測を開始したが城門と覚しき辺りは右前方にある岩山に遮られた射撃困難のため、中隊長は禰宜少尉と私に陣地移動の準備を指示した。

私は射撃目標確認のため歩兵第一線に出るべく挺進班の北田・石丸両通信兵を連れ紡績工場の裏を抜けた途端、視界に黒い山肌を映す瀧江の脈々たる流れに漣の立つのが見え、そのまぶしさが印象的だった。佇む暇もあらばこそ稻の取入れのすんだ前面の畔をとび越

え瀉江に注ぐ小川の土手に散開する広部隊の歩兵への列に割り込んだ。敵情を見ながら九州なまりの下士官から聞き出した話によると、彼は小隊長代理で小隊の兵員数は僅か十数名とのこと。歴戦部隊の損耗の大きさに驚く。

前方北門に通ずる公路の両側家屋は全部焼却され、北門に接近する友軍戦車二輛が望楼高地の前面の深い戦車壕と地雷原に阻まれ立往生しており、城内から突如黒煙が高くあがるのが見受けられた。砲側に引き煽し陣地を紡績工場の方に移動、射撃準備を終え命令をまつ。

正午頃、広部隊第一線は北門より突入との連絡に奥村中隊長は指揮小隊をみて全員歩兵に続けと先頭に立つ。私は我等突撃砲兵は遂に一発の砲弾も撃ち込まず不発に終わったのが癪だと呟きながら駆け出した。

「走っちゃいかん、地雷にやられるぞ。前の者の足跡通りゆっくり歩け」

誰かが怒鳴る。

地雷埋設の公路は道幅は広いが工兵隊の手による庇

急措置として板、椅子等家財を並べた僅か一本の細道を曲折しながら薄氷を踏む思いの足取は重い。路傍に地雷に吹きとばされたと思われる友軍の屍体、爆風に顔を削ぎとられあ然と立ち竦む下士官の姿、無慘、思わず顔を背ける。前の者の足跡を見逃すまいと気の遠くなる様な思いの一系列隊の中にあつてやつと城壁に辿りつく。

息を切らせ汗を拭うて城壁の破壊箇所を這い登る。登りきると視界が一気に開けた。左方足下に緑の衣を薄く纏った奇岩奇峰が思い思いの形で天に向かつて突き出て、その背後に奇怪な姿の岩の峰が蜿々と連なり遙か霧にかすみ薄墨色にはやけている。その麓をゆったりと瀉江が流れ、雲の切れ目から斜光が走り水面の光を受けて白瑠璃のように輝くのは渦か滝か。

唐の詩人韓愈が

「江は青羅の帯をなし、

山は碧玉のかんざしの如し」

と形容したのはまさにこの世界か。

足許に道標あり「曇形山由此到七星巖」

突如、流れ弾が頭上の岩肌に当り響きが谷間を走る。一瞬のためらいの後右側に山道を下りる。破壊家屋と火炎のための黒煙がたちこめ昼なお暗く瓦礫と岩間にこだまする銃声の中を進む。軍公路を真っ直ぐに走る歩兵部隊と別れ敵兵舎を抜け、九十九折れの岩路を進んだ。出会い頭に洞窟から敵兵二名両手を挙げ飛び出す。間隔を入れず銃弾で倒す。瓦礫を踏み分け岩角を廻れば数頭の支那馬の影。

午後三時すぎ、工兵隊の地雷除去作業の進捗を待ち指揮小隊は北門から紡績工場に向け引き帰す。その先頭にあつて約二十頭の支那馬の群をひき連れた奥村隊長の得意顔。戦果は大きい。

思えば六月、新塙河渡河以来泥濘と峻険の中を行軍、病魔と米軍機の銃撃により数多くの輓馬を倒し、乗馬を輓馬に替え、なお火砲一門の残置をやむなくした。中隊のみなが歓声に湧き凱歌をあげたことはいうまでもない。

他中隊の羨望に応じて戦果を分けあい、残余の捕獲馬に馬掛将校欄宜中尉の発案で桂奥・桂林・桂長・桂

崎・桂楡・桂原と中隊幹部の頭文字を名付けたのは桂林市街戦の硝煙消えた一週間後のことであつた。今にして思えば河南（信陽）から湖北へ、湖南から更に広西へ千数百キロに及ぶ大陸縦断、それはまさに空しいいばらの途であつた。

不幸な戦争を省みる

滋賀県 北川 次郎

私は昭和十五年の徴兵検査で、第二乙種となり、軍籍は第一補充兵でありました。在郷軍人として銃後の護りに頑張っており、本土空襲に備えて防空訓練が行われ、夜間の灯火管制は厳しく、少しでも野外へ灯が漏れていまいよう訓練され、真っ暗闇でした。

農繁期になれば出征軍人の留守家族への手伝い、出征兵士の見送り等、何時かは私も応召される日が来ると覚悟をしている時、昭和十七年八月二十四日教育召集令状が届き、十月三日午前八時京都伏見区深草中部